■（４１）いつもと違う被災地の「球音」

「大会に来てくれてありがとう」。夏の甲子園をめざす高校野球岩手大会の開会式で、あいさつにたった主催者や審判らが口々に整列した選手に語った。被災地の高校生が大会に出られたことをみな喜んだ。震災で親が死亡・行方不明になった球児は、同県だけで１４人。祖父母を含めれば３０人を超える。被災地ではいつもと違う球児の夏が始まった。

避難所暮らしの球児もいる。転校を余儀なくされた仲間もいる。用具をすべて流された学校もある。それでも、若者が元気にプレーする姿に被災地は救われるようだ。避難所ぐるみで応援に行こうという被災者もいる。新聞も元気がでるような話題を追いかける。

９３回を数える大会。被災３県の現役球児にとっては、ひときわ重みのある「夏」になる。選手代表は２分２０秒だった選手宣誓で表現した。「チームを一つに、高校球児を一つに、岩手をひとつに」。練習で対戦した被災球児を思いながら考えたフレーズだった。

同じ日の未明。女子サッカーW杯で、「なでしこ」が決勝進出という快挙を成し遂げた。被災地でプレーしていた選手もいる。ここはもう一つ、ひときわ違う夏を見たい（山）